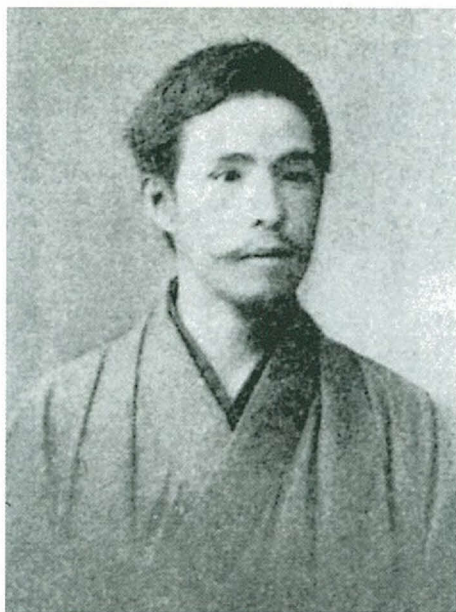


川島奇北きほく

第91話



川島奇北

慶応二年（一八六六）須加の豪農川島梅坪の長男として生まれ、前月号の松岡三五郎と同様に湯本義憲らの盈進義塾で学びました。本名は得太郎で奇北は俳号です。得太郎として北埼玉郡会議員、埼玉県会議員、須加村長の業績と、埼玉新派俳人奇北としての活躍が知られています。

明治三二年高浜虚子の紹介で正岡子規の門弟になります。三四年に自家製の新茶を子規に送り、その返礼の書簡の中で「小包をとけば新茶のこぼれけり」の一句がおくられています。

明治三五年埼玉県最初の日本派俳誌「叢」の創刊に参加するとともに、選者、指導者として「浮城」「めざめ」「若葉」などを始めとして県内のほとんどの俳誌や句会に携わり、中野三允、中山稲青とともに埼玉俳壇の三傑と称されていました。

昭和六年自宅でホトトギス第十四回武蔵野探勝会が開催されるとともに、一年には門弟たちにより羽生市新郷の旧日光裏街道沿いの勤兵衛松並木に句碑が建てられました。碑には奇北の筆で「二歳駒買われて来たり春渡船」と刻されています。

二〇年孫の正と均が太平洋戦争で戦死しますが、「きけわだつみのこえ」に正の日記の一部が収録されています。それからまもなくの二二年に没し墓は長光寺にあります。虚子が哀悼句「冷やかに又爽やかに眠られたし」をよせています。毎年、長光寺で行田市俳句連盟主宰の奇北忌俳句大会が開催されています。

石島雉子郎きじろう

第92話



石島雉子郎

雉子郎は、明治二〇年（一八八七）足袋の原料布である青縞の間屋「綿儀」の二男として生まれ、本名は亀治郎、雉子郎は俳号です。熊中（現熊谷高校）時代から俳句に興味を持ち、川島奇北から俳句の指導助言を受けるとともに、中野三允らに連れられ高浜虚子のホトトギスの句会に出席し、虚子に師事するようになります。

やがて四三年に上京し救世軍士官学校に入学、日本における救世軍育ての親、山室軍平の認めるところとなり、大正二年山室の姪恵子と結婚、同年秋妻とともに朝鮮半島への伝道活動のため京城に赴きます。この時虚子より「而うして柿中将におはしけり」の句が贈られています。京城では「京城日報」俳句欄の選者として活躍します。

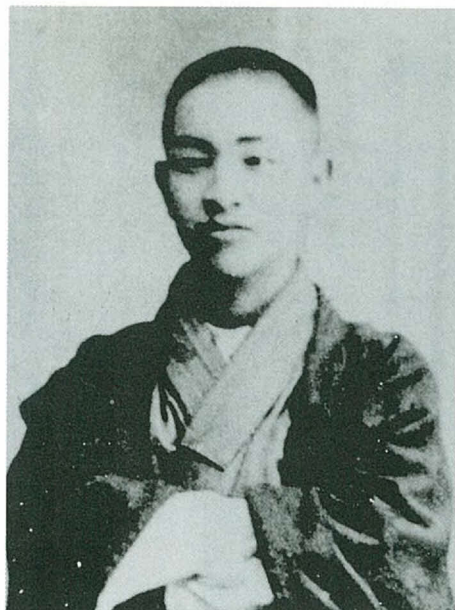
大正五年六月号のホトトギス誌上に虚子が雉子郎の句について長文の批評を載せていますが、その文末は、「雉子郎君の句の特色は、其の温情春の如く如何なる人も其の懐に抱かれることを希ふような点にある。君の句は情の句である。涙の句である。」と結んでいます。一〇年東京に戻り、一二年には、恩師奇北の句集「田園」の跋文を書き刊行を祝すなど、行田の近代俳人第一人者としての評価を得ましたが、一六年に急な病により五四歳の生涯を終えます。

昭和三六年行田市俳句連盟により虚子推奨の句「此巨犬幾人雪に救ひけむ」の句碑が建てられ、現在は下町の小沼橋たもとの公園内に移されています。

小林秀三

ひでぞう

第93話



小林秀三

前月号の石島雉子郎らと共に熊中（現熊谷高校）に徒歩で通った仲間が十数名おりましたが、その中に小林秀三もいました。秀三は栃木県足利郡小俣村で生まれましたが、家が没落し熊谷に移り、さらに当時は行田に転居し、現在の内行田に住んでいました。

秀三は、田山花袋の「田舎教師」の主人公林清三のモデルとして知られています。明治三四年熊中を卒業した秀三は、同級生の父の世話で現在羽生市の弥勒小学校の代用教員になります。後に羽生の建福寺の一室を借り小学校に通いましたが、明治三七年病により若くして亡くなります。

秀三の残した日記を建福寺の住職太田玉茗（きんめい）から見せてもらった花袋が、この日記をもとに明治四二年「田舎教師」を発表します。ですから「田舎教師」の中には、当時の行田の風景や秀三の熊中時代の通学仲間をモデルにした人物が多く出てきます。

その一人石島薇山は、作中には石川機山として登場します。作中清三が仲間と雑誌「行田文学」を発行しますが、その「行田文学」は、薇山が中心となって創刊した「鴛鴦文学」がモデルです。薇山は、俳人石島雉子郎の異母兄で、当時の熊中仲間のリーダー的存在でした。熊中に通う仲間で忍學友會を結成し勉学や文学活動に励みました。秀三も希望に胸膨らませて共に学んでいたのでしょう。明治三三年に書かれた秀三自筆の鴛鴦文学会入会申込書が、行田図書館に今でも残されています。

太田玉茗

ぎよくめい

第94話



前列右から 国木田独歩 宮崎湖処子 太田玉茗
後列右から 田山花袋 松岡国男

玉茗は、埼玉県が生んだ最初の近代詩人であり、日本の近代詩史に名を残す唯一の詩人です。田山花袋に小林秀三の日記を見せたことから小説「田舎教師」が誕生したことは良く知られています。また、作中の成願寺住職山形古城のモデルといわれ、玉茗は号で本名玄綱といえます。明治四年下忍に、忍藩士伊東重敏、母とらの八人兄弟姉妹の二男として生まれ、幼名は蔵三。明治一二年九歳の時城西の正覚寺に、後に羽生の建福寺に預けられました。一二歳で得度し、一六歳の時建福寺住職太田玄暉の養子として太田家に入籍、太田玄綱と改めます。

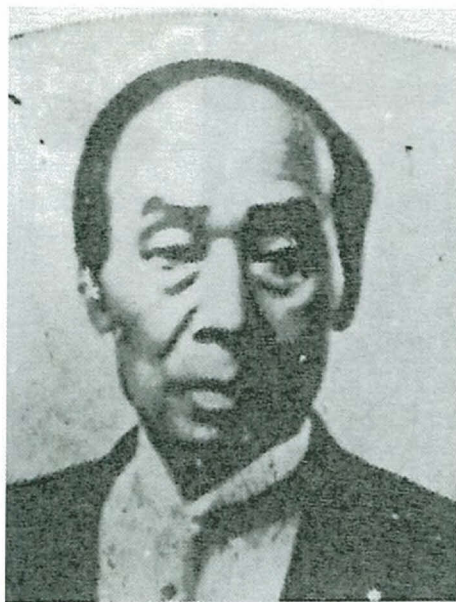
曹洞宗大学林（現駒沢大学）に学んだ後東京専門学校（現早稲田大学）文学科に入学。作家尾崎紅葉を中心とする紅葉会に入会。一月に「小桜絨」に最初の詩「糸くる老嫗」を玉茗堂主人の名で発表します。明治三〇年、国木田独歩、松岡国男、田山花袋、嵯峨の屋おむろ、宮崎湖処子、太田玉茗の六人の合著詩集「抒情詩」を出版、島崎藤村の「若菜集」とともに新体詩運動の中でシソンの作品として高い評価を受け、詩人として認められ、次々に作品を発表していきます。

明治三二年妹里さが花袋と結婚。自らも羽生の建福寺の住職として東京から移り、詩作からも少しずつ離れていきます。抒情詩に集まった独歩や花袋も小説に進み、松岡は民俗学の世界に入り柳田国男として独自の世界を切り拓いていきました。

篠原

叶かのう

第95話



群馬県を代表する日刊紙、上毛新聞社の創業者です。

嘉永三年（一八五〇）忍藩士篠原義正の子として生まれ、進脩館に学び、幼少より武道を好んだと言います。長じて江戸に出て鏡心明智流の宗家桃井春蔵の門に入り剣道に精進します。忍藩出身の剣道家として松田十五郎、村越宇門太が知られていますが、篠原もその技量が評価され、明治三年には忍藩庁から剣術教授を命ぜられます。しかしながら明治維新の大変革を経験して剣道を捨て、5年に東京で堀田敬直に就いて活版印刷技術を習得します。六年に荒川以西一三郡からなる入間県と群馬県を合わせ熊谷県が誕生すると、印刷係として奉職。九年には再び群馬県が独立するに伴い高崎に移り、さらに前橋に県庁が設けられたため移ります。しかしながらまもなく印刷係が廃止されたのに伴い県庁を一〇年に辞めることになりました。

退職して県から印刷機械を買収し、印刷所成立舎せいりゅうせいかを設立します。県の布達や規則・人事などを主とした「官令月報」を発行、次いで「官令日報」と改題し発行日を多くします。二〇年三月さらに「群馬日報」に改題し、隔日発行になりましたが、同年の十一月待望の日刊紙「上毛新聞」を発刊し、苦難の末に今日の上毛新聞社隆盛の基礎をつくりました。

大正一五年七七歳で病没。氏の新聞を通しての業績を讃え、前橋公園の中に昭和3年「上毛文徳碑」が建立されています。

江草斧太郎

第96話



「有斐閣一〇〇年史」より

現在でも日本を代表する法学書の出版社である有斐閣ウヰカクの創業者です。

斧太郎は、忍藩士江草孝太郎の長男として安政四年（一八五七）下忍（現在の城南）に生まれました。明治七年（一八七四）上京し同じ忍藩士伊藤徳太郎が京橋で経営していた書店・慶雲堂に入店しました。この慶雲堂は、明治一年英語読本を翻刻出版しており、この分野での先駆者でもありました。

明治一〇年斧太郎は、独立し神田一橋通に五軒長屋の一角を借家し「有史閣」を開業、間口二間の店に和漢洋書から法帖類までを取扱いました。当時の書店は日本橋、京橋、芝、浅草あたりに集中しており、一橋界隈にはありませんでしたが、この年に開成学校が東京大学になり、華族学校が学習院になるなど、新興の文教地区になる時期でもありました。

一二年書籍の出版を手がけるようになり、店名の「有史閣」を「有斐閣」に改めます。この年忍藩に関係する小林監俊編『区画改正東京全図』や忍藩洋学館教官の青木輔清著『開化初学用文』などを出版しています。一七年には東京大学は本郷に移転しましたが、替わりに専修・明治・法政・中央・日本大学などの前身である各法律学校が次々に創立されます。こうした中で法学書の出版を開始するようになり、その法学書の出版の歴史は、日本の法学の発達史でもあると高く評価されています。明治四一年五一歳で没し墓は浅草称福寺にあります。

林頼三郎

第97話



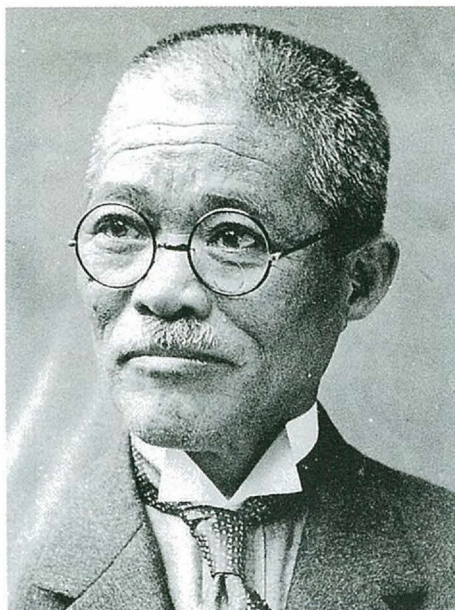
有斐閣が法学書の出版で業績を残しましたが、大正から昭和前半期の法曹界で活躍したのが林頼三郎です。

明治一一年忍藩御殿医三輪禮三の四男として生まれま
す。幕末から明治にかけて苦しい財政の中でも忍藩は、
官費で有為な若者を国内留学させ洋学を学ばせます。父
禮三もその一人で、長崎、横浜で洋学を学び、藩の洋学
館で教鞭をとっていましたが、明治維新後事業に失敗し
財を失います。二三年、頼三郎は、今の商工センターの
所にあった北埼玉郡役所の給仕になり家計を助けまし
た。時の郡長林有章は、頼三郎の学問的才能と、誠実さ
を高く評価し養子とします。二六年中央大学の前身、東
京法学院に入学、三二年東京区裁判所判事を皮切りに、
大審院検事、大正一三年司法次官、昭和七年検事総長、
一〇年に大審院長（現在の最高裁判所長官）、一一年広
田弘毅内閣の司法大臣に就任します。この検事総長、大
審院長、司法大臣の司法三長官を歴任したのは、首相を
務めた平沼騏一郎と二人だけです。

一二年貴族院議員、一三年から二三年まで枢密顧問官
を努めるとともに、母校中央大学学長となります。二三
年に敗戦で公職追放となりますが、二七年再び中央大学
総長に就任し、法曹界の人材育成に尽力します。三三年
五月行田市名誉市民第一号に推挙され、八〇歳で逝去、
墓は熊谷市の熊谷寺にあります。三七年氏の業績を讃え、
水城公園に顕彰碑が建立されています。

村越三千男

第98話

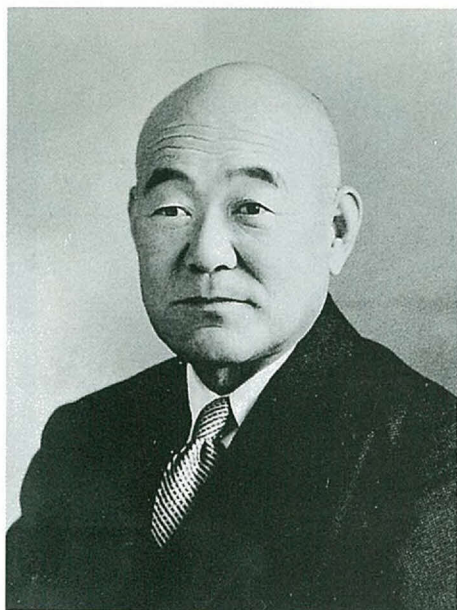


忍藩土村越新九郎弟宇門太の子として明治五年忍に生まれ、明治二七年埼玉師範尋常師範科を卒業、埼玉女子師範、熊谷中学校（現熊谷高校）の教諭を経て、日露戦争中の三八年、教職を辞し、初等教育の先生方の参考書となるような植物図譜の刊行を目指し上京、京橋に東京博物学研究会を設立します。翌三九年から植物学の大家牧野富太郎の校訂・村越三千男写生画『普通植物図譜』を毎月1回発行。この図譜は大人気となり、二年の予定が五年で六〇集発行に拡大します。これを契機に牧野と組み四〇年には『野外植物の研究』『続野外植物の研究』を刊行。四一年には牧野の校訂で待望の『植物図鑑』を刊行します。しかしながら、以後牧野と村越はだんだん離れていきます。やがて大正一四年九月には牧野の『日本植物図鑑』と村越の『大植物図鑑』が競争するように相前後して刊行されるなど、ライバル関係になります。

昭和三年刊行の『集成新植物図鑑』は、三〇年代まで版を重ねる程のベストセラーになり、昭和八年には初のカラー版『内外植物原色図鑑』を刊行するなど、普及版植物図鑑の世界で多くの業績を残します。しかし現在では、植物図鑑といえは牧野図鑑と言われ、村越図鑑は忘れられた存在になりました。牧野と村越の関係を検証した本に依浩三著『牧野植物図鑑の謎』（平凡社新書）があり、参考になります。昭和二二年四月に没し、墓は城西・正覚寺にあります。

村上義之助

第99話



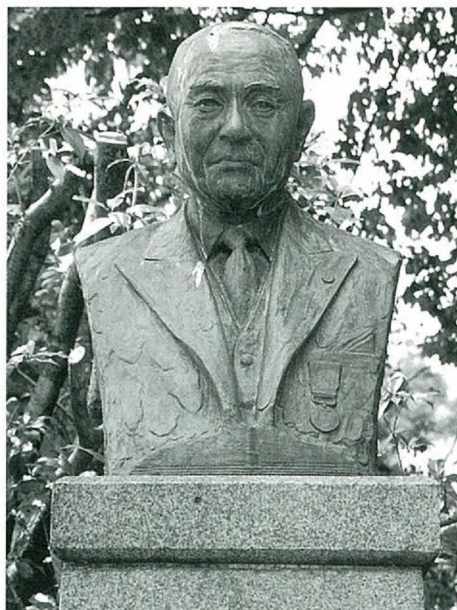
現在も埼玉県内に多くの店舗を展開する埼玉縣信用金庫さいしんの初代理事長です。

明治二二年に誕生した忍町の初代町長村上多熊の二男として二二年三月忍に生まれ、熊谷中学校（現熊谷高校）から埼玉県師範学校を卒業後、小学校教師となり、騎西町、星河村、忍町で教鞭をとります。

大正四年に退職、金融界に転身します。大正七年、義之助外八名の発起人により北谷貯蓄組合の設立を企画したところ、信用組合法による組合にしたらどうかとの町長古市直之進の勧めにより、忍町北谷信用組合を創設。義之助は専務理事として初代組合長時田啓左衛門を補佐しました。九年には忍町信用組合に名称変更します。創設期の大正七・八年頃は第一次世界大戦後の好景気の時代であり順調に業績を伸ばしました。やがて忍商業銀行に次ぐ預金量を獲得するほどの規模になりました。昭和七年には時田組合長の死去に伴い組合長に就任します。第二次世界大戦後の金融機関再建整備法により昭和二二年、埼玉県下の忍町、熊谷、羽生、加須、本庄、秩父、大宮、浦和、川越市の九つの信用組合が合併、埼玉県信用組合を設立、初代組合長に就任します。二六年信用金庫法により埼玉県信用金庫に名称変更し、以後四五年まで理事長として、運営に手腕を発揮するとともに、中小商工業の発展に金融面から多くの業績を残しました。三年、行田市名誉市民に推挙されました。

大澤龍次郎

第100話



水城公園にある銅像

明治二〇年行田の呉服商大澤屋の番頭大澤新兵衛の長男として生まれました。大澤屋の主人大澤久右衛門が、太田の呑龍様の龍と二番目の子であることから、龍次郎と名付けたといわれます。三三年忍進修館尋常高等小学校高等科を卒業後、東京の綿布商安田商店の小僧となります。その後証券界に移り、三九年中澤安籠商店の店員になります。明治四二年、二年間の軍隊生活を終えた後、株式界に勢力を持つ唯一の業界紙「経済新聞」の社長小泉策太郎（三申）の秘書として活躍します。

大正六年には公債株式現物問屋大沢商会を開設。八年には東京株式取引所仲買人の権利を買い大澤龍次郎商店を開業しました。昭和一九年大澤証券株式会社に改称、社長に就任します。

株式界で活躍した龍次郎は、ふるさと行田にさまざまな方面に多額の私財を寄付しました。昭和六年父新兵衛の二一年忌供養に三メートルあまりの無縁塚を清善寺に建立し、翌七年五月八日に塚上に地藏尊を安置、入仏式を行いました。これが新兵衛地藏尊ですが、以来五月八日の例大祭は、行田一のお祭りになりました。昭和四年、開業一〇周年記念に現在の商工センターの所の火見櫓に警報のサイレンをつけた時警塔を寄付し、さらにこの時警塔に夜九時半にチャイムを鳴らす設備を寄付し「愛のチャイム」と命名されました。この他にも行田のために多くの私財を提供し、三三年行田市名誉市民に推挙されています。

あとがき

教育委員会 齋藤 国夫

(平成一四年一〇月二日逝去)

平成六年四月一日号から続けてきました、市報ぎょうだ歴史系譜の連載も百回を迎え終えることになりました。長い間ご愛読いただき、ありがとうございます。

当時のことを思い出すと、この連載を開始するにあたり、どのような内容で書くか、色々悩みました。それまでは郷土史家大澤俊吉氏が連載され、その行田の歴史に対する博識ぶりは、すばらしいものでした。大澤先生と同じ内容で連載しても二番煎じになることを恐れ、迷いましたが、私は私の専門分野で皆さんに歴史に興味を引いていただくことを第一に考えて、連載を引き受けることにしました。

最初の「行田の古代」は、実際に現地に行き見学をする時の見方、注意点を中心に書いてみました。「行田の神々」は、単に神社を紹介するだけでなく、地域との結びつきを書いてみました。「行田の人物志」は、行田で活躍した人物、行田出身の人物を紹介しながら、行田の歴史を紹介する内容としました。

いずれの連載も好評をいただきました。望外の喜びです。

改めて振り返ってみると、行田の歴史や、各々の時代に一生懸命生きた人々の営みが目に浮かぶようです。歴史はこの地に住む私達に、住む誇りと安心感を与えてくれます。今生きている私達は、さらに豊かな住み良い地域づくりに努力する必要があるのではないのでしょうか。

このたびこの連載を一冊にまとめて出版することになりました。直したい部分も無い訳ではありませんが、市報に掲載したまま、まとめることにしました。

この小冊子が、市民の皆さんのふるさと行田の歴史についての入門書になれば幸いです。

埼玉県名
発祥の地
行田